【博士論文概要書】現代沖縄文学の研究――〈戦争〉表象を中心に

柳井貴士

一、研究の出発点と目的

本研究は、沖縄の戦後文学をめぐる〈戦争〉の表象について検討・考察を行うことを目的とする。沖縄の戦後文学は、〈沖縄戦〉を契機として、その後のアメリカの支配――朝鮮戦争、ベトナム戦争と基地の問題から切り離して考えらえない。〈本土／ヤマト〉が、戦争景気を体験するのとは違い、沖縄では戦争そのものと隣接しながら、一九五〇年代の言説が展開された。さらに一九六〇年代から七〇年代にはベトナム戦争が勃発し、それまで支配者として君臨した〈アメリカ〉が綻びをみせた。一九五〇年代の〈アメリカ〉への抵抗の歴史を経て、沖縄の〈戦争〉をめぐる文学作品は〈アメリカ〉や〈沖縄／共同体〉までをも相対化する視座を得たといえる。

戦後、本土においては戦争を主題とした多くの文学作品が発表されたことはいうまでもない。高橋和己は戦場の兵士に課される極限的問いを三つあげた。すなわち「自己が他者を殺すことを正当化するものははたして何か」、「天寿を待たずなぜ自分がそこで死ななければならないか」、「おなじ状況下にあって自分ではなく人がなぜそこで死んでいくのか」である（高橋和己「戦争文学序説」、『展望』一九六四・一二）。例えば、梅崎春生『桜島』『日の果て』、大岡昇平『俘虜記』、武田泰淳『審判』『ひかりごけ』、野間宏『顔の中の赤い月』『崩壊感覚』、島尾敏雄『出発は遂に訪れず』など、高橋の設定した問いに対応する無数の文学作品が発表されていく。「戦後の日常へと自己回復するためには、ある段階をふむことが必要であった。戦争とは何であったのか、戦争によって生活と精神のうえに刻印されたものは何であったのか、それをみつめ、みきわめる精神の営為が必要であった」（松原新一・磯田光一・秋山駿『増補改訂戦後日本文学史・年表』講談社、一九七九・八、七二頁）と述べられるように、戦争に対する自己の内省が文学作品を意味づける「精神の営為」といえたのである。

これら戦争の問題にふれた体験の思想的、文学的営為をふまえるとき、日本内地における沖縄戦をあつかった文学作品の少なさに気づかされる。『鉄の暴風』（朝日新聞社、一九五〇・八）が戦争体験の重要な記録であることは周知のことだが、それは戦争の生存者が残した直接的な苦しみの「声」だといえる。この本土との相対的な文学状況は、近代日本に最後に編入された「県」であり戦後のアメリカによる占領を解放軍として受け止めた事実とも関連している。収容所による生活が続き、紙媒体による雑誌、新聞の発行までに時間がかかり、また占領軍アメリカによる検閲の制限があった事実は見逃せないだろう。

沖縄戦は、アメリカという直接的外敵と、日本兵という内なる他者との戦争ともいえた。この過酷な状況が文学的営為にどのように反映されていくのか、その道筋を考察することが本研究の出発点といえる。沖縄の文学は〈本土／ヤマト〉を相対化するとの指摘がなされるが、それはいったいどのような視座をもつのかを分析する必要があるのだ。

だが、沖縄での戦争は、沖縄戦に限らない。続くアメリカ軍による占領状態の暴力性は、戦争の継続として認識される。またアメリカによる朝鮮戦争、ベトナム戦争は、本土にとっては〈他者〉の戦争という側面が大きかったのに対して、沖縄は前線へ兵士を送る基地として機能した、つまり戦争と連続した場所でもあった。これらの点を視野に入れると、沖縄の文学における戦争の表象は沖縄戦に限定されないことがわかる。そこで本研究は占領状態、アメリカの戦争を含めた〈戦争〉表象をあつかう。

戦後の沖縄の文学は沖縄戦を重要な主題としていることにはふれた。その沖縄戦をめぐる記述は、記録性を重視する記録文学の形式をもって、まず本土において、古川成美の作品を先駆けに登場した。雑誌『雄鶏通信』では戦時下の記録文学特集が組まれ、広く原稿が公募された。一九四〇年代後半は、市民の語りの欲求と相まって記録文学の高揚をみせたといえるだろう。そのような状況のもとで、沖縄戦に関して古川成美が記した『沖縄の最後』、『死生の門』は、本土／ヤマトと沖縄との間に明確な

断絶線をひき、それを著者は無意識のうちに表出している。本論で詳述するように、自己反省の欠如、戦争相手である米国への無条件の親和性、沖縄という戦場・風土へのまなざしの不在であるといえる。戦後に沖縄戦を扱った初期の作品として、また直接体験に裏打ちされた記録文学の書き手として、古川は沖縄を、戦後の日本地図から排除することを厭わないのである。沖縄戦に従軍した古川の筆致は、経済的格差や政治的差別構造による内国植民地として沖縄を捉えているといえる。大日本帝国の〈辺境〉に位置しつつも、〈同化〉運動を内的に、あるいは外的に発信しながら経過した沖縄を、〈本土／ヤマト〉の一兵士（古川）は自らの感傷において外部化してしまう。従軍中、「東風平」という地名の「東風」という発音に本土への郷愁を感じながら、古川の意識においては、あくまでも「東風」を地名に含んだ「東風平」は、外部のものでしかない。〈故郷／本土／ヤマト〉と〈戦地／沖縄〉を同一圏内に配置する意識はないのである。

沖縄は大日本帝国の版図に編入され内国植民地として搾取の対象とみなされ、〈同化〉を強いられたが、一方で沖縄内部から〈同化〉へ呼応した様も指摘できる。このアンバランスな関係から生じた矛盾が、沖縄戦をめぐる文学に集約しているともいえるのである。ここに戦後沖縄の〈戦争〉をめぐる文学の出発点を見出し、また本研究をすすめるものとする。

沖縄の歴史経過において〈同化〉の問題が重要視されながら、またそれゆえに沖縄を本土防衛の要石として位置づけることに積極的にもなり得た〈国民〉の創生は、沖縄戦の惨禍とアメリカの占領により多様性を含みながら中絶していく。

沖縄は沖縄戦による惨禍と、それに続く〈解放軍〉アメリカの幻想、支配者アメリカとの葛藤・格闘、さらに朝鮮、ベトナム戦争へと連続する〈戦争〉と関連付けられた島ともいえる。そこで、古川の沖縄戦を論じながら、沖縄戦を体験していない世代の作家、目取真俊の物語構築に注目し、戦争の〈記憶〉の分有とその不可能性を、共同体を加味しながら検討していく。

また沖縄戦から連続したアメリカ支配への抵抗として一九五〇年代に発行された『琉大文学』と先行作家・大城立裕の関係を考察することで、沖縄の文学表象の重要な転換期を見出すことを目的としたい。そして続く一九六〇年代のベトナム戦争をめぐる文学的営為として、沖縄内部への相対的視座をもった又吉栄喜の初期作品群を、〈アメリカ〉、〈沖縄／共同体〉との関係から考察することを本研究の目的とする。これらの研究は、沖縄と〈戦争〉の多様な関係性を、文学の表象において確認、分析することで、連続する〈現在〉へと視野を拡張することも目的としている。沖縄戦、アメリカの占領、ベトナム戦争、施政権返還へと続く歴史をふまえるとき、〈戦争〉と沖縄は不可分のものであると考えられるからである。

二、本研究の構成

新崎盛暉はアメリカ占領下の沖縄戦後史は、米軍占領や軍政府の設立にはじまり、日本への返還により終焉するとし、それがアジア・太平洋戦争の終戦からベトナム戦争の終結へと続く世界史的画期と関連しながら、「相対的独自性」をもって展開すると指摘する。日本本土の歴史における占領の終了と、沖縄におけるアメリカ占領の時差は、民衆の抵抗運動や沖縄在米軍の位相の変化、沖縄県民の復帰・独立への志向、一九七二年の返還というかたちであらわれることは言うまでもない。その差異の中にあって、新崎の述べる「相対的独自性」は、アメリカ占領下における本土（ヤマト）との差異の指摘であり、その独自の歴史経過を強調するものである。日本への編入、沖縄戦の惨禍、アメリカ（異民族）による支配、日本への返還という歴史は、「相対的独自性」を根付かせる土壌となりえたし、またそれゆえ沖縄の文学表象に多層性を付与する要因となった。

〈日本／本土〉の戦後文学は、「戦後文学史の構想」において、「占領下の文学――一九四五年～一九五一年」、「転換期の文学――一九五二年～一九五九年」、「高度成長下の文学――一九六〇年～一九七〇年」、「内向の世代――一九七一年以降」と構想され、また『戦後日本文学史・年表』においては「戦後変革期の文学――敗戦から一九五〇年代へ」、「敗戦後の文学の転換――講和条約から一九六〇年代

へ」、「日常的現実と文学の展開――一九六一年から一九七七年」と時期区分されている。

岡本恵徳は沖縄の文学を概観して、まず敗戦直後の情況を以下のように述べる。すなわち〈自然発生的〉小説群が『月刊タイムス』、『うるま春秋』といった雑誌に掲載されたが、「その作品は自らの体験あるいは見聞した事柄を、明確な方法や文学的な態度を持ちえないままに、小説化したものであり、「したがって、この時期の作品は、ほとんどすべてが、敗戦後の混乱した時期の沖縄の街や農村の現実を素朴に描き出すに留まっていた」。さらに岡本は、「一九五〇年代後半になると、米軍の土地接収など政治状況の激化とともに、米軍への抵抗、状況の告発を主張し、方法として「社会主義リアリズム」を標榜する『琉大文学』グループが登場し、文学のありかたや方法についての自覚を迫ることになる」とし、一九六〇年代には『新沖縄文学』発刊、大城立裕の芥川賞受賞（一九六七年）を経て、一九七〇年代に入り、施政権返還を経て、一九七五年ごろから、本土資本の流入、インフラ整備による「土着的」なものの喪失や変化を内面化し得た作品が登場すると指摘した。

本土の文学の展開と同様に時期区分を設定することは不可能ではないが、そこに新崎の述べた「相対的独自性」が文学表象に反映されている点は言うまでもない。また戦後の文学に強く影響を与えたのが沖縄戦であり、続くアメリカによる土地の強制収用やベトナム戦争の展開は、沖縄における不可視の戦争の継続を意味している。

本研究において、〈沖縄戦〉を契機に、連続する〈戦争〉状態下の一九五〇年代文学運動、ベトナム戦争を経験した沖縄における文学表象、さらに戦争を体験していない世代による〈沖縄戦〉の記憶の分有をめぐる文学作品の検討、考察を試みる所以は、上記のような「相対的独自性」を含有した、不可視の戦争状態における沖縄の文学作品の考究を展開するためである。

仲程昌徳は『沖縄の戦記』において、戦記作品の時期区分を行い、古川成美『沖縄の最後』、『死生の門』への検討を行っている。ここで仲程は『沖縄の最後』に対して記録文学の様相をかりながら、「作者の思考の単純な二者択一性」、「自己批判」の欠如、「底の浅い現状肯定の楽観主義」的な作品とし、また『死生の門』に関して、敗戦後の社会常識から単純な善悪論で展開されたとして批判をくわえる。だが、『沖縄の最後』テクストをめぐっては再版される際に、大幅な書き換えが行われ、その書き換えという行為と出版の間にある問題に関しては、管見の限り指摘、批判を加えている研究はない。そこで本研究は初出『沖縄の最後』をめぐるテクストの詳細な考察と、書き換えられたテクストの持つ政治性や作家の視座の限界を新たに検討していく。

沖縄戦を本土に認識させる契機となったのは〈ひめゆり〉をめぐる諸テクストであることは周知の通りである。とりわけ、一九四九年『令女界』に連載された石野径一郎の『ひめゆりの塔』は多くの読者を得た。また一九五三年に公開された映画『ひめゆりの塔』（今井正監督）は、その後、一九六八年、一九八二年、一九九五年にリメイクされていく。〈ひめゆり〉をめぐる言説の展開については、仲田晃子（「「ひめゆり」をめぐる語りのはじまり」『友軍とガマ――沖縄戦の記憶』評論社、二〇〇八・一〇）、尾鍋拓美（「「ひめゆり」はどのように表象されてきたか――創成期の「ひめゆり」表象を中心に」『沖縄文化』二〇〇九・三）など、近年、研究の進展がうかがえる。仲田は詩歌からときおこし、太田良博「無言の歌」を〈ひめゆり〉表象の嚆矢と指摘した。〈ひめゆり〉言説の生成において、テクストの検討や、〈沖縄戦〉の生存者の手記、記録を丁寧に並べ、捕虜収容所から発生した〈ひめゆり〉言説とそれへのカウンターナラティヴとしての言説（仲宗根政善の作品など）の並列状況を挙げた。本研究では、さらにその〈語り〉の欲求に着目し、捕虜収容所におけるP・Wたちの自らの代理表象たる〈ひめゆり〉の少女たちという位相に注目した。

一九五〇年代、琉球大学に拠った学生たちの雑誌『琉大文学』に関する研究は、現在その端緒についたといえよう。『琉大文学』同人には新川明、川満信一、岡本恵徳、齊舎場順、嶺井政和、豊川善一、儀間進、いれいたかし、清田政信、中里友豪、岡本定勝らがおり、沖縄の文学、文化、思想にとって重要な人物を輩出した。『琉大文学』は「文学・思想・歴史的に意義深い文芸誌であったにもかかわらず、『琉大文学』は占領下という悪条件ゆえに関係資料の散逸が甚だしく、原本を揃えて所蔵する機関もなかったのが実状」だったが、鹿野政直の研究を通過し、現在全体が復刻されている。占領下にお

いて、『琉大文学』同人が何を希求し、何に抵抗したか、その視点をもった鹿野の研究は、戦後に支配者として登場したアメリカへの「否」の意志として『琉大文学』同人をとらえ、さらに一九五四年七月第六号にはじまる先行世代への挑戦と、本土の文学・思想の受容といった行き方を詳細に考察している。本研究では、現行の研究深度を深めることを目的として、先行研究をふまえながら、『琉大文学』と同人における先行作家のひとり大城立裕との関係に着目した。岡本恵徳によって「敗戦後の混乱した時期の沖縄の街や農村の現実を素朴に描き出す」作品があらわれた一九四〇年代後半に登場した大城の初期作品を検討し、『琉大文学』同人との論争を通して、本土との相対的位相、沖縄内部への関心という契機が、大城作品に与えた影響を考察した。

沖縄はベトナム戦争への〈基地〉としての役割を果たす。占領という事態が、土地の強制収用、島ぐるみ闘争、高等弁務官の威圧的態度――自治の神話、アメリカ兵による多くの犯罪など、外的要因による自己や本土との相対的周縁性の確認の契機をもちえたことは周知の通りである。ベトナム戦争の泥沼化と施政権返還の時期を経て、沖縄の文学表象は新たな視点を獲得したといえる。目取真俊の指摘に従うなら、『琉大文学』の批判を契機に、〈沖縄において書くこと〉の意味が反省され、沖縄の歴史や文化の主体性を回復する方向で創作がなされていったのは、戦前との大きな違いであり、「日本本土への「同化」一辺倒から、本土を相対化する視点が生み出され、沖縄独自の神話、民俗、歴史、言語が、沖縄独自の表現への模索」をうみ、「このような方向性の獲得は、沖縄の近代以後の表現の大きな転回点をなすものであり、七〇年代以降の多様な表現に道をひらくものであった」のである。『琉大文学』から七〇年代の文学への展開を考えるとき、本研究では、七〇年代の文学表象として、沖縄戦からアメリカによる支配、ベトナム戦争の前衛基地という沖縄の役割りをふまえ、又吉栄喜の初期作品群をとりあげる。又吉の初期作品群は、一九七五年、第一回「沖縄文学賞」を受賞した「海は蒼く」をはじめ、沖縄で生活する人々を中心に据え、闘牛（「島袋君の闘牛」）といった文化、米軍との対立構図（「憲兵闖入事件」）、他者として現れる米兵との階層（「ジョージが射殺した猪」、「パラシュート兵のプレゼント」）と同時に、内なる沖縄における階層（混血への差別、本島と諸島の差異など――「カーンバル闘牛大会」、「シェーカーを振る男」）が問題となっている。すばる文学賞受賞の「ギンネム屋敷」、芥川賞受賞の「豚の報い」はすでに先行研究が存在している。本研究では、先行研究で深く掘り下げられることの少なかった初期作品群に注目し、沖縄というトポスが関連付けられる戦争の痕跡と、共同体内部の在り方を〈少年〉のまなざしを中心に考察する。沖縄戦から、占領体制、ベトナム戦争への出撃前衛基地という位相を、又吉は外部（アメリカ）批判だけではなく、内部（共同体）への批判の視座をもって作品を構想し、それゆえに一九七〇年代――施政権返還後の文学表象にとって重要な画期をもたらしたと考えられるのである。

さらに沖縄戦を体験していない世代の作品として目取真俊の「水滴」、「魂込め」をとりあげる。戦争の惨禍を経験として持たない目取真俊は、マジックリアリズム的手法を用いながら、戦争の痕跡を丁寧に、現在を生きる人々の中に見出していく。作品中、戦争体験者と未体験者は沖縄の共同体において同時に生活をしているが、両者を分岐するのは〈記憶〉であった。「水滴」、「魂込め」において重要になるのは、戦争の〈記憶〉という問題であり、その点は先行研究でも指摘されている。同時に見落としてならないのは、沖縄に固有の政治性である。日本本土による植民地状況と戦争の惨禍、戦後のアメリカ軍による占領、本土復帰後も継続されるアメリカ軍の基地問題、本土との複数の差違が目取真俊という作家をとりまく要素として連動しているのである。

「水滴」の芥川賞受賞に際しての選評において注目すべきは、その「寓意性」である。沖縄戦体験者徳正の足から零れる水滴を、同じ戦争を体験した死者たちが飲みに来る、またその水滴が現今の生者の毛生え薬になるという――徳正の水滴の終焉により、効果は無化される――「寓意性」は、作品を駆動する大きな仕掛けであることは言うまでもない。しかし、ここには沖縄戦の〈記憶〉を抱え込み生きる者の悲しみと生そのものが含有する歓びの両義性、またその〈記憶〉の分有の不可能性が指摘されなければならない。

以上の点をふまえ、本研究は、先行論文・研究を用いながら、〈戦争〉に連続した沖縄めぐってつ

むがれた文学作品を研究対象とする。